

スーダンの「有用植物」＜その1＞

はじめに

AAI ニュースでは、以前、「スーダンかつさら随想録」と称して、スーダン国カッサラ州でのプロジェクトの経験を通じて得られたスーダン農耕文化や栽培植物として、「有用植物」の断面をシリーズで随想風に紹介したことがあった。その後、筆者のスーダンでの活動現場は、カッサラ州からリバーナイル州へと舞台が変わり、プロジェクトで取り組む農業形態も天水農業（Dry Farming）中心からナイル川の河川灌漑による灌漑農業（Irrigated Agriculture）に重心を移すことになった。それは、スーダンの農業を別の角度から見つめなおすいいきっかけであったが、ここでは新シリーズとして、これまでの観察・取材の蓄積に基づき、スーダンにおける「有用植物」とその利用について、再度とりあげてみたい。

とは言うものの、ここでの「有用植物」のとりあげかたは学術的考察というより、あくまでプロジェクト経験を通して、



地方都市の野菜市場

スーダン人の日常の生活誌に重点をおいたものであることをお断りしておく。われわれのような農業プロジェクト従事者の目標としては、実践的に農民の生計向上を目指す場面が多く、そのような実学的・実用的な観点から「有用作物」の検討がはじまり、具体的なアクションに結びつけることが求められるからである。

「有用植物」の来歴、栽培方法、調製・加工法、利用、販売、食文化などのさまざまな側面に焦点をあてながら、さらに筆者自身の独自の視点をまじえつつ、「有用植物」を通したスーダン農耕文化について、できるかぎり多角的・複合的に紹介できればと考えている。さて、スーダン農耕文化複合というとき、西アフリカ地域を含む広域

的な意味での大スーダンをさす場合があるが、ここでいうスーダンとは、とくに断らないかぎり、南北分離以降のいわゆる北部地域の「スーダン国」における見聞に限定したものであることにご留意いただきたい。

ところで、農業プロジェクト従事者が有用植物を農民の生計向上に結びつけていく場合、その手段や方法に選択肢が多ければ多いほどいい



タマネギの調製作業

ということになる。スーダンの中央部にはナイル川が南北に貫流しており、灌漑農業の成立にその恩恵は計り知れないが、気候区分として、スーダンの大部分は乾燥・半乾燥帯に属し、「有用植物」の選択肢としては乾燥条件の制約を受けている。かつて湿潤気候に属する熱帯圏インドネシアを旅した際、その在地の「有用植物」の種類の豊富さや住民利用の多様性に圧倒されたことがある。筆者が、日常的にフィールドとして接してきた、シリア、パレスチナ、スーダンといった乾燥国・地域と比較すると、農民の生計向上を目指した場合の、「有用植物」の種類、資源利用の幅、調製・加工の選択肢の多さなどに度肝をぬかれた感があった。一方において、そのような湿潤地の多様性は、ちょっとうらやましくもあったが、スーダンのような乾燥地でも「有用植物」の利用にはそれなりのバリエーションや深度がみられることも確かであり、利用面において興味深い点もあると考えている。

ここでは、乾燥地スーダンでの「有用植物」について、それは、もちろんオクラ、タマネギなど栽培植物を含むが、ときには畑周辺の樹木や雑草などに注目し、プロジェクト実施の観点から模索する有用性について報告してみたいとおもう。